

日本における外来アライグマの出産時期・産子数・妊娠率

日本獣医生命科学大学 獣医学部 野生動物学教室 加藤卓也

1. はじめに

アライグマ (*Procyon lotor*) の原産地域である北米では、繁殖生態に関する研究が進められている。過去の体系的な研究 (Sanderson and Nalbandov, 1973) やレビュー (Gehrt, 2003) によれば、メスのアライグマは生後 10 ヶ月から 1 年で性成熟に達し、冬から春にかけて交尾をして、約 63 日の妊娠期間を経て 3、4 頭の子を出産する。また、繁殖時期や産子数には緯度などの環境条件による違いがあり、低緯度で温暖な地域では夏から秋にかけて出産がみられる、産子数は低緯度の地域のほうが高緯度の地域よりやや少ないことなどがわかっている。また、1 才より 2 才以上の個体のほうが妊娠率は高い、つまり繁殖に参加し成功する個体は多いことが報告されている。

我が国におけるアライグマの野生化は、1962 年に愛知県犬山市での事例が初めてとされる (揚妻-柳原, 2004) が、現在は 47 都道府県すべてに広がったと考えられる。本種は、農業、住環境、生態系への悪影響が問題視されてきた。また、重要文化財への被害 (川道ら, 2010) や人と動物の共通感染症の原因となる病原体を保有することが報告され、最も広範な問題が危惧される外来動物の一つである。

野生化したアライグマの問題に対して、各地で捕獲による野外からの排除が取り組まれている。しかしながら、全国で年間 1 万頭あまりの捕獲数に達していながら、ほとんどの地域では本種の分布拡大ならびに個体数の増加を抑制することはできていない。アライグマの生態的特性を十分に理解し、より科学的な対策が実施されることが望まれる。

そこで我々は、主に本州東部 (神奈川県鎌倉市) と西部 (京都府亀岡市) における捕獲個体の分析によって、アライグマの出産時期、産子数、妊娠率といった繁殖生物学的パラメータを明らかにし、先行的に研究が進められた北海道のデータ (Asano *et al.*, 2003) との差異を検討することを計画した。

2. 出産時期

野生化したアライグマの出産時期について、妊娠メスから摘出した胎子の CRL (頂臀長) 計測による妊娠日齢、および幼獣の歯式から査定した月齢の算出によって調べた。

出産時期について、鎌倉市では 2 月から 10 月まで (Kato *et al.*, 2009)、亀岡市では 4 月から 9 月までと 11 月と、春から秋にかけて及ぶことが明らかとなった。北海道では主に 3 月から 5 月に出産が集中する (Asano *et al.*, 2003) ため、夏季に幼獣の捕獲圧を上げることが推奨されているが、少なくともこれらのような地域では幼獣への捕獲圧が不十分になる可能性がある。

3. 産子数と妊娠率

産子数や妊娠率は、雌性生殖器の肉眼的な観察から妊娠の有無および妊娠の痕跡である胎盤痕の確認によって調べた。

産子数の平均は、鎌倉市では1才が3.3で2才以上が4.1で (Kato *et al.*, 2009)、亀岡市では、1才が3.1で2才以上が3.8であった。北海道では、1才が3.6で2才以上が3.9であり (Asano *et al.*, 2003)、これまでに明らかな地域差はみられていない。

妊娠率は、鎌倉市で1才が65%と2才以上が78%で (Kato *et al.*, 2009)、亀岡市で1才が59%と2才以上が89%であった。なお、北海道で、1才が66%と2才以上が96% (Asano *et al.*, 2003)、原産地域と同様に2才以上は1才より高い。このように多少の地域差は認められているが、1才で6-7割の個体が繁殖に参加することがわかる。

さらに、鎌倉市では、出産時期の幅が広いことから、晩期に産まれたメスは、早期に産まれたものに比べておよそ1年遅れて初出産を迎えることが明らかとなった (Kato *et al.*, 2012)。また、亀岡市では、0才 (当年生まれ) の個体から胎盤痕を有する個体が見つかり、生後1年に到達する前に繁殖へ参加する個体の存在が示唆された。

今後の展望として、出産時期の早・晩それぞれに生まれたメスが、どのように成熟し繁殖へ参加するかを明らかにすることが繁殖生物学的なメカニズムを追究し、効果的な捕獲手法を検討するうえで必要だと考える。

引用文献

- 揚妻-柳原芳美. 2004. 愛知県におけるアライグマ野生化の過程と今後の対策のあり方について. 哺乳類科学 44 (2): 147-160.
- Asano, M., Matoba, Y., Ikeda, T., Suzuki, M. and Ohtaishi, N. 2003. Reproductive characteristics of the feral raccoon (*Procyon lotor*) in Hokkaido. J. Vet. Med. Sci. 65(3): 369-373.
- Gehrt, S. D. 2003. Raccoons *Procyon lotor* and allies. pp. 611-634. In: Wild mammals of North America: biology, management, and conservation. 2nd ed. (G. A. Feldhamer, B. C. Thompson, and J. A. Chapman, eds.), Johns Hopkins University Press, Baltimore, Maryland, 1216pp.
- Kato, T., Ichida, Y., Tei, K., Asano, M., and Hayama, S. 2009. Reproductive characteristics of feral raccoons (*Procyon lotor*) captured by the pest control in Kamakura, Japan. The Journal of Veterinary Medical Science 71(11): 1473-1478.
- Kato, T., Uno, T., Fujioka, Y., Kobayashi, K., Takayanagi, E., and Hayama, S. 2012. Difference in age at first conception between early and late litters of feral raccoon (*Procyon lotor*) in Kanagawa Prefecture. The Journal of Veterinary Medical Science 74(5): 637-640.
- 川道美枝子・川道武男・金田正人・加藤卓也. 2010. 文化財等の木造建造物へのアライグマ侵入形態. 京都歴史災害研究 11: 31-40.
- Sanderson, G. C. and Nalbandov, A. V. 1973. The reproductive cycle of the raccoon in Illinois. Illinois Natural History Survey Bulletin 31: 29-85.